［現代社会学部紀要　15巻１号, Ｐ15－22（2017）（一般論文）］

独居高齢者のごみ出しに関する質的考察
～ソーシャルサポートに着目して～*

岩　永　　耕**

A Qualitative Study of Taking out the Garbage of Old Women Living Alone
― With a Focus on social support ―

Ko IWANAGA**

キーワード：独居高齢者、ごみ出し、ソーシャルサポート、質的研究

要旨

本研究では、市街地と農村部が混在するＰ県Ｑ市に住む独居高齢者21名に対し、彼らのごみ出しや、親族やヘルパーからのサポート等についてインタビュー調査し、対象者を「自力でのごみ出し可否」により、①自力で可、②自力では不可の２つの類型に分けた。その上でそれぞれを、①性別、②年代、③地域性、④ごみステーションまでの距離、⑤ヘルパーの利用、の５項目によってさらに２ケースずつに分け、特徴的な類型の要因を考察した。その結果、自力でごみが出せるのは16名で、５名は親族かヘルパーに依頼をしていた。地域別に類型をみると、市街地では「自力では不可」は２ケースであり、この２名はいずれもヘルパーを利用していた。農村部では「自力で可」が10ケースもいたのに対して、「自力では不可」は３ケースのみであった。このうち自力でごみが出せないケースは、Ｉさん、Ｏさん、Ｗさんの３ケースで、Ｉさんだけがヘルパーに依頼しており、Ｏさんは裏に住んでいる弟に頼んでおり、Ｗさんは隣接市に住む娘にごみを持ち帰ってもらっていた。彼らの中にも近隣や友人が差し入れをしてくれたり、回覧板を代わりに回してくれたり、普段の話し相手になってくれている例もあったが、「ごみ出し」には他者に見られたくない「恥」の側面があり、他人に運ばせることを躊躇する者もいるだろう。そのためごみ出しのサポートは、自分により近い存在である「娘」や「兄弟」に頼るのが自然であり、親族が近くに住んでいなければ、近隣や友人ではなく、ヘルパーのように「精神的な距離がある存在」の方が頼み易い可能性がある。このドーナツ現象では「親密な人たち（一次集団）」と「見知らぬ人たち（外側の三次集団）」の「中間」である「社会的関係の二次集団」に「近隣や友人」が当てはまる。彼らには「羞恥」を抱くことから、独居高齢者らは「近隣や友人」にはごみ出しを頼まないのではないかと推察できる。Ｑ市のごみステーションはスチール製で蓋が重く、高齢者が開閉するのは骨が折れる。「ごみ出し」が近隣との「交流の場」であったとしても、身体的にステーションの蓋が開閉できなくなると、自力でごみを出すのを諦めてしまうことがあり、それによって自宅の衛生状態が悪化したり、近隣との交流が途絶えたり、様々なものを購入する意欲まで減退してしまう可能性がある。

１．問題の所在と目的

厚生労働省（2015）によれば、独居高齢者世帯はこの30年足らずに３倍以上に増加した（1986年の128万世帯から2014年は595万世帯）。その世帯数は高齢者がいる全世帯の中で、13％から25％に増えている。社会保障・人口問題研究所（2013）の試算によると、2035年には46の都道府県（山形県を除く）において高齢者がいる全世帯の３割以上を同世帯が占めることになる。また、加齢によりごみの分別やごみ出しといった行動が難しい高齢者が増えると見込まれている。中でも独居高齢者にとって避けられない問題のひとつに「ごみ出し」がある。高齢者の抱える課題に関して、小島（2015）は高齢者へのごみ出し支援を取りあげ、支援制度の利用意向に影響する心理的要因を分析し、「身体的負担感」と「精神的負担感」から形成される「ごみ出しの負担感」に加えて、「社会との繋がり・安心」や「プライバシー・遠慮」等の心理的要因が影響していることを明らかにしている。また、小島（2016）は全国1,741市町村の廃棄物部局を対象に調査を行った結果、「今後、

* Received December 12、2016
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki wesleyan University, 1212-1 Nishieida,Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

高齢化によってごみ出しが困難な住民が増えると思うか」という質問に対し,「とてもそう思う」と「そう思う」とを足した回答割合は約86％にも達していた。また山口ら（2012）は、東京都Ａ市Ｂ団地に住む高齢者に対して、困り事をサポートしてくれる人や相談相手等について調べたところ、「ごみ出しについて少しでも困っている」と答えた人のうち、サポート源がいないと回答した人の割合は、「ごみ出し」に関しては約31％もおり、家事（約24％）、買い物（17％）、通院（17％）よりも上回っていた。このことから生活に欠かせない諸々の行動と比べても「ごみ出し」に関するサポートの必要性が高いことがわかる。それらのようなごみ出し行動に限らず、高齢者を対象とした調査研究は量的なものが多く見受けられる（岩永ら2014）。しかし、人々の動きが予測でき実践に活用するためには、課題発生の「要因」や「背景」を明確化できる、「質的な調査・分析」が適切であるとの指摘もある（フリック2011　他）。

そこで本研究では、市街地と農村部が混在する市に住む独居高齢者21人に対し、彼らのごみ出し行動や、親族からのサポート等についてインタビュー調査した結果を質的に分析し、独居高齢者のごみ出し行動の実態とその要因を検討する。

２．研究の方法

(1)調査対象地域と選定理由

本研究ではＰ県Ｑ市（高齢化率23.3%、独居高齢者世帯8.5% 総務省2011）を対象地域に選定した。それは研究成果を全国的に社会に活かしていきたいためである。このＱ市は高齢化率や独居高齢者の割合が全国平均値（高齢化率22.8%、独居高齢者世帯9.2% 総務省2011）に近いため、分析結果が一般化し易いと考えた。

(2)調査対象者

Ｑ市のＲ町（市街地）及びＳ町（農村部）に住む独居高齢者21名にインタビュー調査を行った。対象者を市街地と農村部から選定したのは、この市が2005年に市街地であった「市」と、農村であった「５つの町」が市町村合併してできた自治体であり、同じ市内であっても地域性に差があると考えたためである。なお対象者の選定は、両町の民生委員に、①調査に答えられる判断能力があること、②調査への協力意思があること、③独居高齢者であること、の３点を依頼し委ねた。

(3)調査項目

a）インタビュー調査の項目

①年齢、②職業、③出身地、④自動車の運転、⑤独居生活年数、⑥要介護度、⑦ヘルパーの利用とサービス内容、⑧ごみ出しの可否、⑨ごみ出しのサポート内容、⑩ごみ出しのサポート源、⑪ごみステーションの位置、⑫子ども・兄弟姉妹の所在地・接触頻度、⑬子ども・兄弟姉妹からの授受サポート内容、⑭近隣や友人からの授受サポート等をインタビュー調査した。

b）ごみステーションまでの距離

各高齢者宅から、高齢者が利用しているごみステーションまでの歩数を調査した。

c）ごみステーションの形状

各高齢者が利用しているごみステーションの形状を撮影した。

(4)調査方法

2013年10月から同年12月に各高齢者の自宅で半構造化インタビュー調査を行った（調査の平均時間は約45分）。その調査の中で「利用しているごみステーションの位置」を高齢者に尋ね、各高齢者宅からステーションまでの歩数を計測し、調査後にメートルに換算した[注1)]。また、各高齢者が利用しているごみステーションの形状を撮影した。

(5)分析方法

a）対象者の概観

まず、対象者ごとに上記の調査項目について概観した。次にそれらを踏まえて以下のとおり類型分析した。

b）類型分析

独居高齢者は自力でごみ出しをしている人と、親族やヘルパーのサポートを授受している人がほとんどであった。そこで、冷水（2009）の手法を参考にして、対象者を「自力でのごみ出し可否」により、①自力で可、②自力では不可の２つの類型に分けた。その上でそれぞれを、①性別、②年代、③地域性、④ごみステーションまでの距離、⑤ヘルパーの利用、の５項目によってさらに２ケースずつに分け、特徴的な類型の要因を考察した。

３．倫理的配慮

本調査は、九州保健福祉大学大学院在学中に行った調査のため、同大学の倫理委員会で調査の承認（承認番号13-026）を得た上で、対象者に調査依頼をする際に調査計画を文書と口頭で説明し、承諾書に署名をしてもらった。この調査計画には①調査目的、②調査対象、③調査項目、④調査回数、⑤調査所要時間、⑥匿名性の確保、⑦結果の公表、⑧ＩＣレコーダによる録音、⑨録音データの厳密な保管が記載されている。個人が特定もしくは限定される可能性のあるデータ（特徴的な職業他）については、意図的に明確な表現を避けた。さらに対象者の語りは、地域の特定を避けるために全て方言から標準語に修正している。

４．研究結果

(1)対象者の概要

対象者は表１の独居高齢者21名であった。対象者の平均年齢は80.6歳であり、居住地は市街地であるＲ町が８名で、農村部であるＳ町が13名であった。なお、対象者の年齢は調査時点のものである。

自力でごみが出せるのは16名で、５名は親族かヘルパーに依頼をしていた。彼らの自宅からごみステーションまでの距離は、最も短い人で約34mであり、最も遠い人は約148mも離れていた。ステーションの形状は鉄製で箱型のもの（図１参照）が大半だったが、一部は網状のものであった（図２参照）。

表１　独居高齢者の個人属性とごみ出しの現状

対象者	性別	年齢	地域	自力でのごみ出し可否	ごみステーションまでの距離（メートル）	ヘルパーの利用
A	男	82	市街地	可	64.4	利用
B	女	79	市街地	可	63.4	なし
C	女	87	市街地	可	138.0	なし
D	女	74	市街地	可	53.5	なし
E	女	77	市街地	可	44.1	なし
F	女	74	市街地	可	126.3	なし
G	男	88	市街地	不	36.2	利用
H	女	90	市街地	不	40.1	利用
I	女	83	農村部	不	93.6	利用
J	女	82	農村部	可	39.2	なし
K	男	67	農村部	可	43.1	なし
L	女	80	農村部	可	105.0	なし
M	女	81	農村部	可	43.6	なし
N	女	82	農村部	可	35.7	なし
O	女	78	農村部	不	34.2	なし
T	女	84	農村部	可	49.1	なし
U	女	83	農村部	可	62.9	利用
V	女	70	農村部	可	40.1	なし
W	女	87	農村部	不	136.2	なし
X	女	88	農村部	可	147.6	なし
Y	女	77	農村部	可	65.9	なし

図１　Ｑ市のごみステーションの形状（鉄製箱状）

図２　Ｑ市のごみステーションの形状（網状）

(2)類型分析の結果

まず21名全体でみると「自力でのごみ出し可否」は「可」が16ケース【類型〔1〕】で、「不可」が５ケース【類型〔2〕】であった（表２参照）。

表２　独居高齢者のごみ出し可否の類型（全対象者）

	ごみ出し可否	該当ケース数	類型番号	対象者（独居高齢者）
全対象者	自力で可	16	〔1〕	A, B, C, D, E, F, J, K, L, M, N, T, U, V, X, Y
	自力では不可	5	〔2〕	G, H, I, O, W

「性別」と「自力でのごみ出し可否」による類型についてみると、男性では「自力で可」が２ケースで「自力では不可」が１ケースであった【類型〔3〕〔4〕】。女性では、「自力で可」が14ケースに対し「自力では不可」は４ケースのみであった【類型〔5〕〔6〕】（表３参照）。

表３　独居高齢者のごみ出し可否の類型（性別）

性別	ごみ出し可否	該当ケース数	類型番号	対象者（独居高齢者）
男性	自力で可	2	〔3〕	A, K
	自力では不可	1	〔4〕	G
女性	自力で可	14	〔5〕	B, C, D, E, F, J, L, M, N, T, U, V, X, Y
	自力では不可	4	〔6〕	H, I, O, W

「年代」と「自力でのごみ出し可否」による類型についてみると、「平均よりも年齢が上」では「自力で可」が７ケースで「自力では不可」が４ケースであった【類型〔7〕〔8〕】。「平均よりも年齢が下」では「自力で可」が９ケースもいたのに対し「自力では不可」が１ケースのみであった【類型〔9〕〔10〕】（表４参照）。

表４　独居高齢者の自力でのごみ出し可否の類型（年齢別）

年齢	ごみ出し可否	該当ケース数	類型番号	対象者（独居高齢者）
平均より年齢が上	自力で可	7	〔7〕	A, C, J, N, T, U, X
	自力では不可	4	〔8〕	G, H, I, W
平均より年齢が下	自力で可	9	〔9〕	B, D, E, F, K, L, M, V, Y
	自力では不可	1	〔10〕	O

地域別に類型をみると、市街地では「自力で可」が６ケース【類型〔11〕】で「自力では不可」は２ケースであった。農村部では「自力で可」が10ケース【類型〔13〕】もいたのに対して、「自力では不可」は３ケースのみであった【類型〔14〕】（表５参照）。

表５　独居高齢者の自力でのごみ出し可否の類型（地域別）

地域	ごみ出し可否	該当ケース数	類型番号	対象者（独居高齢者）
市街地	自力で可	6	〔11〕	A, B, C, D, E, F
	自力では不可	2	〔12〕	G, H
農村部	自力で可	10	〔13〕	J, K, L, M, N, T, U, V, X, Y
	自力では不可	3	〔14〕	I, O, W

次に「ごみステーションまでの距離」別に対象者を分けた。すると「ごみステーションまで近い」は、「自力で可」が12ケースもいたのに対し「自力では不可」は３ケースのみであった【類型〔15〕〔16〕】。「ごみステーションまで遠い」は「自力で可」が４ケースもおり、「自力では不可」は２ケースのみであった【類型〔17〕〔18〕】（表６参照）。

表６　独居高齢者の自力でのごみ出し可否の類型（ごみステーションまでの距離）

ごみステーションまでの距離	ごみ出し可否	該当ケース数	類型番号	対象者（独居高齢者）
ごみステーションまで近い	自力で可	12	〔15〕	A, B, D, E, J, K, M, N, T, U, V, Y
	自力では不可	3	〔16〕	G, H, O
ごみステーションまで遠い	自力で可	4	〔17〕	C, F, L, X
	自力では不可	2	〔18〕	I, W

次に「ヘルパーの利用」別に対象者を分けた。すると「ヘルパー利用あり」は、「自力で可」が２ケースなのに対し「自力では不可」は３ケースであった【類型〔19〕〔20〕】。「ヘルパー利用なし」は「自力で可」が14ケースもおり、「自力では不可」は２ケースのみであった【類型〔21〕〔22〕】（表７参照）。

表７　独居高齢者の自力でのごみ出し可否の類型（ヘルパー利用別）

ヘルパー利用	ごみ出し可否	該当ケース数	類型番号	対象者（独居高齢者）
ヘルパー利用あり	自力で可	2	〔19〕	A, U
	自力では不可	3	〔20〕	G, H, I
ヘルパー利用なし	自力で可	14	〔21〕	B, C, D, F, J, K, M, N, T, V, X, Y
	自力では不可	2	〔22〕	O, W

(3)考察

1）ごみが抱える「プライバシー」と「不衛生面」

市街地の独居高齢者の中で、自力でごみが出せないのはＧさんとＨさんの２ケースであった（類型〔12〕）。この２名はいずれもヘルパーを利用していた。以下はＧさんの語りである。

「ごみ出しの方は、あの、ヘルパーさんに車庫まで持っていってもらってて。というのが朝、８時半までに出しとかないといけないでしょ？」

「まにあわない。それで、ヘルパーさんは３時半から４時半までですもんね。ですから、車庫まで持って行ってもらっていて。そして、あの、車に積んで、そこまで私が持っていく、朝から。」

上記のようにＧさんはごみ出しを完全にヘルパーに任せている訳ではなかった。Ｇさん宅からごみステーションはわずか36m程度で、自宅からごみステーションまでが今回の調査対象者の中で３番目に近いが、ヘルパーに依頼してごみを自分の車に積んでもらっておき、翌日の朝、車でごみステーションまで運んで捨てていた。内臓と腰に疾患を抱えるＧさんはそのようにして、ヘルパーと自家用車での運搬とを組み合わせてどうにかごみが出せていた。以下はＨさんの語りである。

「ごみ出しは、来た時にしてくれるんですよ、掃除屋さんが、ヘルパーさんが。」

Ｈさんは公団住宅に住んでおり、ごみステーションはエレベーターで１階に下りてからわずか40mほど先にある。しかし自分ではごみは運ばずにヘルパーに頼んでいる。そのヘルパーを「掃除屋さん」と呼んでいたのが印象的であった。

農村部の独居高齢者のうち自力でごみが出せないケースは、Ｉさん、Ｏさん、Ｗさんの３ケースであった。このうちＩさんだけがヘルパーに依頼しており、Ｏさんは自宅の裏に住んでいる弟に頼んでいた。以下はＯさんの語りである。

「なんでも（弟がしてくれる）。わたしも、ごみも袋に入れて、ちゃーんと、そこまでごみをだして頂戴ねって。なんでも、なんでもしてくれるから。だから助かるんですよ、（弟がしてくれなかったら手に）下げていかないといけないから、あそこまでですね。」

Ｗさんは隣接市に住んでいる娘が来る度に、その娘にごみを持ち帰ってもらっていた。

「そしてこの頃はね、娘が長崎まで持っていくの。みーんな、持っていってくれるんですよ。（中略）Ｚ市のごみ袋を自分の家から持ってきて、それに移して持っていってくれるんですよ。私がそこに溜めてると。娘も大変ねって思うんですよね、ごみまでねえ。（中略）持っていって、捨ててくれないといけないし。いいのよ、どうにかなるんだからって言ってもね、持っていってくれるんですもんね。今日、持っていってくれない時、（自分でごみを）出さないといけない時は、私がぼちぼちあれして…。もうこれ（体）があれ（衰弱）すれば、蓋も開けられないんよ。（中略）鉄の蓋を。それ（鉄）じゃなければいいんだけど。（中略）横開きだったら良いんだけど。もう、上にこう（開けないといけない）でしょ？ここ（ひじ）の普段から痛いから…。（中略）だからね。もう、閉めるときは、ちょこっとして（開いて）、逃げるんですよ。ガチャンって（鉄の蓋が降りて）来るから。あれ（鉄の蓋）はカラスは開けられないでしょうけど、人間も開けられないのよ。」

Ｏさんの場合はごみの日に自宅の裏に住んでいる弟が搬出してくれるが、Ｗさんの娘は市外に住んでいるため、Ｗさん宅に来ることができるのは週末が多く、ごみの日の朝からＷさん宅まで来ることはとても難しい。そのためごみは娘が来た時に娘に持ち帰ってもらうしかないのである。このように、ごみ出しを頼む相手はヘルパーもしくは

親族のみで、近隣や友人に頼んでいるケースは無かった。それはごみ出しという行動の持つ「プライバシー」性に加えて、「不衛生」な側面が影響している可能性がある。この「プライバシー」性と「衛生面」についてさらに考察していく。

今回の調査対象者らの中にも、近隣や友人が差し入れをしてくれたり、回覧板を代わりに回してくれたり、普段の話し相手になってくれている例があった。しかし「ごみ」には他者に見られたくない「恥」の側面がある。また、もしもその高齢者がごみの中身を見られて構わなくても、ごみは「不衛生なもの」を含むことがあり、それを他人に運ばせることを躊躇する人もいるだろう。そのためごみ出しのサポートは、自分により近い存在である「娘」や「兄弟」に頼るのが自然である。そして、そのような親族が近くに住んでいなければ、近隣や友人ではなく、ヘルパーのように「精神的な距離がある存在」の方がかえって頼み易い可能性がある。

鑪（1998）は、私たちは「親密な人たち」と「見知らぬ人たち」との「中間」に属する人たちに対して羞恥が生まれるとし、それを「ドーナツ現象」としている（図３参照）。この論考を用いるなら本調査対象者（独居高齢者）の「娘や弟」が鑪のいう「親密な人たち」に当たり、「ヘルパー」は「見知らぬ人」に該当すると考えられる。このドーナツ現象では「親密な人たち（一次集団）」と「見知らぬ人たち（外側の三次集団）」の「中間」である「社会的関係の二次集団」には「近隣や友人」が当てはまるといえる。この鑪のドーナツ現象を用いるなら、「近隣や友人」には「羞恥」を抱くために独居高齢者らは彼らにはごみ出しを頼まないのではないかと推察できる。小島（2015）も、「高齢者のごみ出しに関するサポートは、近隣住民によるサポートよりも、公的なサポートの方がプライバシーへの懸念が和らぎ、支援を利用したいという意向に繋がる」としている。

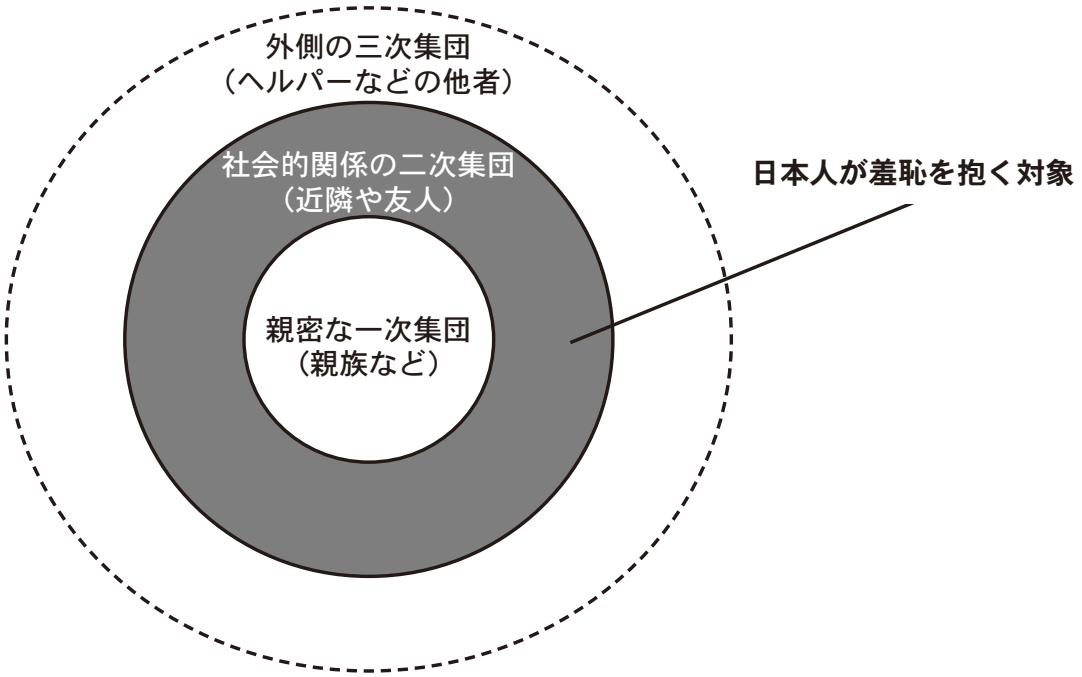

図３　対人関係のドーナツ現象
（出典　鑪（1998）の図を筆者が一部加工）

2）ごみ出しサポートに関する行政への期待

小島（2016）も指摘しているように、多くの自治体では収集日の朝の決められた時間までにごみを出すことになっている。その時間までにヘルパーに自宅に来てもらうことは困難なため、自治会・町内会の「きまり」に背いてでも、収集前日の夕方にヘルパーに来てもらい、ごみを出してもらっている高齢者もいる。Ｇさんのように自家用車で運ぶ高齢者は稀といえよう。また親族にごみを出してもらえる場合でも、Ｏさんのように親族が本人の自宅に隣接して住んでいなければ、その親族が朝の決まった時間にわざわざ高齢者宅を訪問してごみを出すのはかなりの負担となる。そのため、Ｗさんのように娘らが週末に高齢者宅に来て、娘の自宅にごみを持ち帰る形式の方が現実的かもしれない。

また今回の調査対象者の多くは子どもがいたが、今後は生涯に渡って結婚をしない人や、結婚をしても子どもを作らない（もしくは子どもができない）夫婦がより増えていくと考えられる。そのため、「子どもや兄弟のような頼れる存在」が誰もいない独居高齢者が、今後は急速に増えていくと想像できる。そして、介護保険などのサービスや親族からのサポートが得られなかったり、それらの資源で対応できなくなっても、「ごみ」は生きていく上でどうしても発生するため、家に溜め続けることになる。そのようにして最終的に自宅が「ごみ屋敷」になったり「セルフ・ネグレクト」につながる危険性もあるといえよう。

それを防ぐには市町村の公衆衛生や、高齢者福祉、保健衛生の各担当部署らが連携し、その地域の「規模・地形・地域資源に合ったサービスや制度」を開発することが急務である。ここからは具体的なサービスについて述べていきたい。

3）安否確認を兼ねたごみ収集の取り組み

長崎県長崎市では、「ふれあい訪問収集事業」として、高齢者や障害者のみの約1,700世帯を、再任用された20名程度の職員が、通常のごみ収集とは別に２人一組で回っている。彼らはごみ出しを引き受けると同時に高齢者の安否確認も行っている（長崎新聞2015）。

また同県時津町では、ボランティアが独居高齢者や高齢者夫婦世帯のごみ出しを支援している。このボランティアには、年４回に渡って2,000円相当の葡萄やミカンといった町の特産品が配られている。この事業の特徴は、高齢者らが「自らボランティアを見つける方式」をとっている点である。ただしどうしても高齢者が自分では見つけられない場合は、自治体にボランティアの確保を申し出ることも可能である（長崎県時津町2016）。

4）ごみステーションの利便性向上と行政からの補助

近年は高齢者や障害者、妊婦などでもごみが出し易いステーションが市販されている。それはたとえば、「蓋が軽量な上に、ボタンを軽く押すだけで蓋が開く機能」や、「足元のフットペダルを踏むだけで蓋が開く」といった機能である（図４・５参照）。

図４　軽量ごみステーションの例
（出典 花谷工業　http://member.hot-cha.tv/~kk-hanaya/type_af.html　2016.11.29）

図５　軽量ごみステーションの例（フットペダル）
（出典 花谷工業　http://member.hot-cha.tv/~kk-hanaya/type_af.html　2016.11.29）

Ｑ市のごみステーションはスチール製のため蓋が重く、高齢者が一人で蓋を開けるのは相当に骨が折れる。それまでは「ごみ出し」が近隣との「交流の場」のひとつであったとしても、身体的な衰えによってステーションの蓋が開けられなくなると、Ｗさんのように自力でごみを出すこと自体を諦めてしまうことが少なくない。そしてそれによって、自宅の衛生状態が悪化したり、近隣との交流が途絶えたり、様々なものを購入する意欲まで減退してしまう可能性もある。

そのような事態を防ぐために、熊本県美里町では上限３万円までごみステーションの整備費を補助している（熊本県美里町 2015）。高機能のごみステーションは10万円以上のものが多いが、自治体から全く補助がない場合に比べれば、それらを自治会・町内会が新たに整備する動機付けになり得ると考える。

５．今後の研究課題

今後は本研究での結論について統計的に検証するために、Ｑ市において独居高齢者を対象とした量的調査を行う必要があると考える。また、高機能なごみステーションが普及している自治体において、高齢者のごみ出し行動がＱ市のような自治体とどのような相違があるのかについても調査する意義は大きいといえよう。

謝辞

本研究の調査に多大なご協力を頂いた、Ｐ県Ｑ市の独居高齢者・民生児童委員・市社会福祉協議会職員・地区社会福祉協議会役員の皆様方に、深く感謝申し上げます。

参考文献・注

・注１　筆者の歩幅を0.495mとして、歩数から距離に換算した。そのため、エレベーターの上下の移動距離は含めていない。
・厚生労働省（2015)「平成26年国民生活基礎調査 」http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/（2015.10.30）
・国立社会保障・人口問題研究所（2013)「日本の世帯数の将来推計（全国推計―2010（平成22）年～2035（平成47）年―」http://www.ipss.go.jp/pp-ajsetai/j/HPRJ2013/hhprj2013_ honbun.pdf（2013.8.19）
・小島英子　多島良　朱文率ほか「共助と公助による高齢者のごみ出し支援制度－利用意向に影響する心理的要因－」『廃棄物資源循環学会論文誌』26、p.117-127、2015
・小島英子「高齢者のごみ出しを巡る課題と支援方策」『都市清掃』69（329)、p.8-13、2016
・山口麻衣　笹谷春美ほか「大都市団地居住高齢者の社会関係と生活ニーズ充足のためのソーシャルサポート－ライフコースとケアリング関係の視点からの分析－」『ルーテル学院研究紀要』46、2012
・ウヴェ フリック・小田博志監訳『新版　質的研究入門―〈人間の科学〉のための方法論』春秋社、p.18、2011
・岩永耕　横山奈緒枝「高齢者に対する国内ソーシャルサポート研究に関する考察　－近隣サポートと独居高齢者に着目して－」『最新社会福祉研究』9、p.269-84、2014
・総務省（2011)「平成22年国勢調査 人口等基本集計（男女・年齢・配偶関係、世帯の構成、住居の状態など)」http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001035030&cycode=0（2012.11.16）
・冷水豊『「地域生活の質」に基づく高齢者ケアの推進』有斐閣、p.39-64、2009
・鑪 幹八郎「恥と意地」講談社，p.40-42、1998
・原口司『(この町でキラリ　ながさき達人図鑑サポート）坂の上 笑顔に「ほっ」』長崎新聞朝刊、2015.2.15、p.13
・長崎県時津町「ごみ出しボランティア活動事業を開始しました」http://www.town.togitsu.nagasaki.jp/life/pub/detail.aspx?c_id=39&id=5752（2016.11.29）
・花谷工業　http://member.hot-cha.tv/~kk-hanaya/type_af.html　（2016年11年29日）
・熊本県美里町「ごみステーション整備費補助金制度について」http://www.town.kumamoto-misato.lg.jp/q/aview/101/1755.html　（2016.11.29）